
深海

高杉春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海

【Nコード】

N8388B

【作者名】

高杉春

【あらすじ】

大学の帰り道で予期せぬ人間と帰ることになった浅井は帰りの道中ではじめ問題を出される。答えは二つ、期限は24時間、浅井の出す答えは その問いの真の意味とは

（前書き）

携帯で読まれることをお勧めします。小説のテーマは『対話』と『選択』ですので、別段変わったことは起きません！

君は選ばなければならぬ、右か左かをね。どれだけ悩んでもいい、しかし選んだら、決して振り返ってはならない

「君は死ねるか？」

そう聞かれたのは23時間前だった。その暴力的な質問を僕に投げかけた男は僕の座る席のはるか前で教授の『自己満足』とも呼べる話に耳を傾け、ノートに書き留めている。

広すぎる教室だ。中にいる人間の数と教室のキャパシティが合っていない。その割の合わない教室で中央通路を挟み、前側の席にいるのは十人足らず、後部座席は三十人はいるだろう。満席になれば約二百人は入れる。きっとテストの時はそうなるだろう。

教授はそんな状態でも気落ちすることなく自分の持てる知識を披露している。

後部は階段教室になっているので、僕がいる最後列のひとつ手前から、あの男が何をしているのが、手に取るようにわかる。

男の名は三井雅樹。こうして同じ講義を受けていても、隣に並んでノートを見せ合うような仲では決していない。ただゼミが一緒というだけなのだ。嫌いでも好きでもない。僕にとっては中性みたいな、わかりやすく言えば『どうでもいい』男なのだ。

でも、僕はこの『自己満足』な教授の講義より、『どうでもいい』

この男が気になって仕方がない。断っておくが、僕はゲイではないし、彼女だっている。だけどあの男ともう一度会わなければならぬ。

講義が終わるまでまだ1時間近くある。このまま寝るぐらいなら、なぜこんな羽目になったのかをもう一度思い返してみても悪くはないだろう。

くだらない講義だった。経済学部なのに「簡単に単位が取れる」なんて助言を信じて、日本国憲法を学ばされるなんて…。

真面目に受ければ、それなりに意義のある講義なんだろうけど、単位欲しさで受けてる僕には九十分の睡眠時間でしかない。案の定、寝て過ごし、みんなが帰る音で起こされた僕はその後の用事もなかった。足早に教室を出て、校門に向かった。

四限終わりで、校庭にはまだ帰る気のない学生がそこら中にたむろしていた。まだ空は明るく、日の傾き度合いが夏の到来を告げようとしていた。

僕は友人を待つでもなく、面も振らず、一目散に校門に向かっていった。その時、正面に三井雅樹が、壁に体を預けて立っているのが目に入って来た。

当然、視野に入ったが、一緒に帰ろうか、と誘うような仲ではなく、会っても挨拶する程度の間柄で、今回もそうするつもりだった。

「やあ、浅井君」

目と目が合った瞬間、珍しく彼が先に話し掛けて来た。僕は予想外の展開に中途半端に口を開けた状態で固まってしまった。

「よ、よお」

マヌケ面でなんとかそれだけ言うことが出来たが、それ以上言う必要もない。本来ならここで終わりだ。僕はまた歩き出す。だけど違った。

「一緒に帰ろうよ。電車だろ？」

いやだ、とは言えない。少しの間の我慢だと言い聞かせた。

「いいよ。帰ろう」

彼はいつもの無表情を崩して、良かった、と微笑んだ。

「後、10分くらいで次の電車が来るから、少し急ごう！」

僕は腕時計を見ながら、焦るふりをして、歩調を速めた。普通に歩けばギリギリで間に合うのだが、彼と歩きながらお喋りしている自分を想像出来なかった。早く駅に着いても、電車が来る時間は変わらないが、そうした方が早く別れられると勘違いしていたのかもしれない。

台詞を吐いてちょうど五歩目を踏み出した時、僕は思わぬ言葉を耳にした。

「そう焦るなよ。焦りからは何も生まれない。無駄なことだよ。君がやっていることは」

前を歩いていた僕は、彼のその敵意を剥き出しにした言葉で否応なく振り返った。それと同時に演技を見破られていると直感で分かつ

た。後ろを歩いていた彼はまるで全てを見透かすように細く鋭い目をさらに細くしてこちらを見ていた。

「そうかな？１０分しかないんだよ」

焦りはあったが、冷静さは失っていないかったし、ことを荒立てるのは避けたかったが、元来仲良くするつもりもない。

「そういうことじゃない。駆け引きは必要ないと言ってるんだ」

「駆け引きなんかしてどうなる？早く帰りたいだけだ」

「早く帰りたい？ならさっきまでのペースで歩けばいい。それで間に合う」

「早く駅に着くことに越したことは無い。そうだろ？何が言いたいんだ？」

僕は少しムキになっていた。彼にそれが伝わったのか、少しの沈黙の後、それまでの無表情を崩して、寂しそうな一面を見せた。

「ゴメン。怒らせるつもりはないんだ。友達でもないやつに変なことを言われて、君も気分が悪いだろう」

「…別にいいよ。早く帰ろう」

…もう関わりたくなかった。通り過ぎて行く学生たちがちらちらとこちらを見ている。

そんなに珍しいか？君達の隣を歩く“友人”という存在はお互いの大学生活を楽しむための都合のいい“友人”じゃないのか？

表面化してないだけではないのか？

どうでもいい疑問を投げかけたくなる。

僕は慚然として、また駅の方へ歩き出した。走らなければたぶん電

車には間に合わないだろう。次の電車まで20分以上待たなくてはならなかった。

僕たちは並んで歩き出したが、当然、会話はあるわけがない。走ろうかとも考えたが、三井の方を見ると下向き加減で歩いていたので「走ろう」なんて言えない。見兼ねた僕は適当に話し掛けることにした。

「三井は大学に友達いないの？」

「……いるよ。少しは」

三井が誰かといるところを見たことがなかった。ゼミでも嫌われているわけではない。かといって、好かれてもいない。自分自身が目立つ人間だとは思わないが、それでも彼は『目立たない人』という言葉がぴったりの人間に思えた。

顔も恰好いいと言われる部類ではないが、合コンに何度か顔を出せば、そのうち彼女が出来ると思えるし、服装もまるで興味なし、というわけではない。

つまり、基本的に『普通』なのだが、彼は喋らなかった。教授に発言を求められると答えるのだが、自分からは会話しようとしなかった。

それは、人と関わるのを避けようとしているように僕には見えていた。

「いつもは友達と一緒に帰っているのか？」

「方向が違うから帰ってないよ。浅井君は日によるみたいだね」

「そうだな。今日はひとりだった」

「彼女とデートかい？」

「違うけど、知ってるのか？」

民家を抜けて、線路沿いの道を並んで歩いてた。地平線に沈み始めている太陽が眩しい。

「ゼミの時、よく都築君とそういう話をしてるじゃないか。みんな知ってるよ」

「都築は声が大きいからな。困ったやつだ。三井は彼女……いるのか？」

「いないよ。わかるだろう？」

わかるだろう？

その言葉にどう返答したらいいのかわからなかった。お世辞で返そうものなら、また見透かされる、そんな不安が頭を過ぎっていた。だから自分の気持ちに素直になるように心掛けた。

「三井は口数が少な過ぎる」

「人見知りが激しいだけだよ」

「そうか……でも彼女は欲しいのか？」

「いらんないなんて言えないよ。僕だって欲しい」

少しだけ嬉しかったのは、彼が他の大勢の男性と同様に彼女が欲しいという、感覚を持ち合わせていることだった。

「そう思っているのなら、すぐにできるよ」

世辞ではない。本当にそう思ったことを言っただけだ。だけど、彼の望みは最初から違っていた。彼は歩く速度を急に落として、僕の注意を引く。

「できないんだ。君がいる限り」

「……」

「立川裕美を知ってるだろう?」

聞いたことがある。僕が付き合っている女性の名前だから、当たり前だ。

足を止めて、振り返った僕の横を電車が通り過ぎて行く。やっぱり間に合わなかった。

「知ってるよ!同じ学部の子だな」

「……」

「前にも言っただけ……」

「駆け引きは必要ない……か?」

僕たちは完全に足を止めて、向き合っていた。

「そうだね。僕は彼女と高校から一緒だった」

「それで?好きなのか?」

「君達が付き合ったのは一ヶ月くらい前のことだね」

「質問に答えてないよな?それって」

「彼女を想わない日はないよ。僕は彼女のためなら死ねると思う」

「死ねるなんて大袈裟だろ!第一、付き合ってもないのに死んでどうする!」

「覚悟を言っただよ!…君はどうなんだ?」

「どうって何だよ?」

「君は死ねるか?」

三井は真剣な目でこちらを睨み、僕は視線を逸らしたら負けだ、と自分に言い聞かせていた。

「死ぬも死なないも考えたことないよ!“死”そのものだってな!」

「じゃあ、考えてみるといい。君が考えている以上に“死”は傍にあるんだよ」

そんなことを考える必要はない。だけど、それでは彼の望みを満たすことはできない。僕はもう一度、大根役者を演じた。

「そうだな、僕は帰りの電車で死ぬかもしれない。その十字路口で轢かれるかも。だから考えるよ。んゝそれでも彼女が危険な目に遭っていたら助けに行くよ。命懸けで助けと思う」

「……」

「好きで付き合ってるんだ。当然なんじゃないかな？」

「……」

「何か言ったらどうだ？」

沈黙したまま僕の台詞を聞いていた彼は、無言で歩き始め、僕の傍を通り過ぎた。振り返った僕は、さらに意見を求めようとしたが、先に口を開いたのは彼だった。

「いい答えだね。君はそれで満足なのか？」

「答える必要がない質問にはこれくらいで十分だろ？」

これは無意味なやりとり。端から見れば、きっとそう映る。立ち止まって、こちらに向き直る彼を僕は追い抜こうと歩き始めていた。

「分かった。24時間あげるよ」

「話を聞いているのか？」

「聞いているよ。君は真面目に答える気がない。というより君は彼女のために命を賭けるということのイメージすら出来てない」

「当たり前だ」

「24時間のうちに精一杯考えるといい」

「そんなことをする必要はない！」

これまでで一番大きな声で言った。僕は彼に立川裕美のことを諦めてほしいとは思わなかったが、だからといって、付き纏われるのはうんざりだった。

「それに、振られたからといって、僕に当たるなよ。何の恨みがあるんだ？」

「恨みなんかない。ただ浅井君の気持ちを知りたいんだ。今日も昨日も君はひとりでさっさと帰っている。彼女と会いもせずに」

「……」

「君は彼女と付き合って一ヶ月くらいのはずだ。なのにほとんど会っていない。…本当に好きなのか？」

付き合って一ヶ月なら、多くのカップルが毎日でも会いたくなるだろう。そんな時期に僕と立川裕美はほとんど会っていなかった。

「さっきも聞こうと思ったけど、裕美のことをよく知ってるな？」

「同じ高校だった人間なんてあまりいないんだ」

僕は知っている限り、同級生に同じ高校だった人はいなかった。といより大学進学で田舎から出てきた僕にいたるはずがない。

「そうだな」

「いいかい？明日の今頃に答えてくれればいい。どんな答えであれ、君が真剣に考えてくれたのなら。僕は君達とは関わらないと誓う。」

もうノーとは言えない。立川裕美が三井に相談していたという事実は僕から否定する力を奪った。そして“関わらない”という言葉は今の僕にとって魅力があり過ぎた。

「わかった。そのかわり……」

「約束は守るさ」

「頼む」

「もうすぐ次の電車が来るから走った方がいい！」

「三井は？」

「僕は反対方向だから」

「……そうか。またな」

「また」

僕は逃げるように走った。いや、逃げていた。三井の視界から消えたかった。

改札を抜けるとちょうど電車が到着した。時計を見ると、5時15分だった。

家までの四駅の間には僕は改めて、三井の顔を思い出していた。

無表情で色白、細い目、彼が立川裕美に何かをするとは思えない。

だけど「キレる」タイプではないだろうか。僕が明日用意する答え次第で何をするかわからない。でも、答えなんて二つしかないじゃないか。言いようのない不安が次々に浮かんできた。

「彼女のために死ねるか、死ねないか」

今すぐ答えても、明日答えても、どんなに必死に考えても結論は二つしかない。一体彼は何を僕にさせようとしている？

そのうちに電車が降りる駅に着いた。僕はすぐに家には向かわず、コンビニに寄り、その道中で立川裕美に電話をした。三井の事があったために彼女に連絡を取っておきたかった。万が一ということもある。

「はい」

三コール目に出た彼女の声がいつもと変わらないことに安心した。

「もう家に帰ったのか？」

「ううん。友達とご飯を食べに行く」

「それならいいんだ。気をつけて」

「わかった。ありがと」

三井の事について聞こうとも思ったが、話がこじれる気がして、やめた。そのことについては後日でもいいはずだ。僕が今すべきことは彼女のために死ねるかどうかを考え抜くことのはずだ。でもイメージがでなかった。コンビニで立ち読みをしても、家でテレビドラマを見ている。

付き合って一ヶ月になる立川裕美のために僕はどこまでならできるのだろうか？彼女が「私のために死んで」と言っても、絶対死ねない。でも三井が言いたいことはそういうことじゃないはずだろう。

「彼女に死が迫りつつあれば、君が代わりになってやれるか？」

記憶の中のあの線路沿いで三井がそう言った気がした。あの細い目で僕を見据えながら。

急に寒気がして、ベッドの中に潜り込んだ。そしてイメージする…

銃口を向けられた立川裕美。立ち尽くす僕。僕は彼女の代わりになつてあげれるのか？彼女が助けを請うような目で僕を見ている。だけど足がすくんで動けない。声も出ない。「僕が代わりに人質になる」なんて名ゼリフははけない。

そこまで出来るほど、大切な人なんだろうか？

好きなんだ、でも、一生を共にするなんてわからない。来月には心変わりです別れているかもしれない。でも…もし彼女が死んでしまつたら、一生後悔して生きるだろう。でも、その場の僕は「なんとなるだろう」と樂觀視してしまつかもしれない。

イメージが現実味を帯びれば帯びるほど、答えが遠退いていく気がした。

もやもやした気分が苛立ちを募らせ、僕は布団から跳ね上がり、窓を開けて、煙草に火を点けた。そして立川裕美のことを思い浮かべた。

僕が立川裕美に会わないのは、僕の意地悪さが原因だと分かっていた。僕は以前彼女にフラれていた。大学一回生のころだ。大学で初めて出来た友人から校友をつたい、いつの頃からか一緒にグループで遊びに行くようになっていた。

僕は次第に彼女に惹かれて行き、ある日の飲み会の後、酒が入っている状態で告白に踏み切った。そして、素面の彼女の答えはノーだった。

当然のように、その後僕はやけ酒に走り、飲みつぶれて、その一ヶ月後には立川裕美に彼氏が出来たことを知った。それから二年が経ったゴールデンウィーク、僕は彼女に告白されたという具合だ。

僕はもう彼女のことを諦めていた。それは好きではなくなつたという意味ではなく、可能性がないと決め付けていたのだ。

告白された事は正直嬉しかったが、同時に彼女に対する不信感も持っていたことが、意図的に距離を置く原因となった。

「結局どうなんだろう？」

答えの返らぬ虚空に煙混じりの疑問を問い掛け、僕はテレビを消し、

風呂に入って寝ることにした。
でもなかなか寝付けず、寝返りを果てしなくうった。

起きた時はもう考える余裕すらなかった。目覚ましい時計が13時を告げていたからだ。僕は一、二限の授業を寝過ごし、三限すら遅刻が確定してしまっていた。慌てて準備をして、家を飛び出した。教授に嫌な顔をされつつ、教室に堂々と入り、最後列の一つ手前に座った揚げ句、ずっと外を見ていた。立ち並ぶ校舎の先に広がる青に照準を合わせながら、僕は今日の朝に見た夢を思い出していた。透き通った海の底に沈んで行く僕と、海面に向かって泳いでいく立川裕美。だけど顔は見えないがおそらく僕は微笑んで下から見ているのだ。これから僕は薄暗い深海へと堕ちて行くのにもかかわらず……。

講義が終わっても、僕はそこに座り続けていた。ただぼんやりと空を見つめながら。

ほどなくして、次の講義のために人が入って来る。やがて、三井雅樹が入って来た。彼は選り放題の席の中で、前列中央を選んだ。教授からすれば、そこは優等生の席に外ならない。僕は彼が席に座る直前こつちを一瞬だけ見て

「答えは用意出来たか？」

そう言った気がした。もしそうならば僕はこう答える。

「出来てるさ。そうでなければここにはいない」

やがて教授が入って来て、『自己満足』とも呼べる講義が始まった。

日本国憲法に興味のない人間にとっては、テストだけがなければい

い授業だ。まだ六月の最初ではこの膨大な空席が埋まることはない。時計を見ると、4時15分。僕は教授の話最後まで聞くことなく教室を出た。三井はそんなことに気付くはずもなく、一心不乱に教授の言葉を書き留めている。

校舎を出て、人も疎らな中庭の自動販売機でコーヒーを買い、ベンチに座って飲む。カップルと思わしき連中が何組かいる。中には獲物を狩るような目で女学生を眺めながら喋る男のグループもいる。呆然とそれを観察していた僕の背後から声がした。

「またサボってるの？」

聞き覚えのある女性の声、間違ってはいけない。

「いや、……まあそういうことだね」

「ふうん。これ以上単位落としていいわけ？」

前に回り込んだ立川裕美は手を後ろに組んで、僕を覗き込んだ後、隣に座った。彼女は背が高く、色白で髪が長い。上手くすればモデルの仕事が一つくらいは舞い込む可能性を秘めていた。そう考えるとライバルがいても不思議ではないのかもしれない。

「単位は落とさない。裕美は講義じゃないのか？」

「ないよ、私はそれほど単位に困ってない」

「さすが！後期は是非とも単位の簡単に取れる講義を教えてくださいたい」

「うん。まあいいよ」

「ところで、講義もないのになんで学校にいるの？」「学校来てるのに講義に出てないのも一緒じゃない？」

「出てたよ。ついさっきまで。あまりに退屈だから出てきたんだ」

「私も友達と喋ってるのが退屈だから出てきた」

「似た者同士でわけだな」

「一応そういうことにしとく」

僕たちは笑い合った。でもそれは付き合ってから初めてだったかもしれない。

「まだ帰らないのか？」

僕は三井と会わなければならない。彼女にいてもらっても困る。

「この後、就職のセミナーがあるの。知らなかった？」

「知らなかったな。もうそんな時期なのか？」

「まだ早いけど、そういうのって知っておいた方が得じゃない」

「余計に焦るだけだよ。今はその時のために単位を取ることが大事なんだ」

その時、校内に四限の終わりを告げるチャイムが鳴った。座り込んでいた男達が立ち上がり、何やら喋っている。どうやら獲物を観察したかっただけらしい。

「じゃあ私行くね！」

立ち上がった彼女に聞いておくことがあった。

「聞きたいことがあるんだけど？」

「急になに？」

「どうして僕と付き合おうと思ったんだ？」

「……好きだからじゃ、おかしい？」

「でも一回断ってる。僕は諦めていた」

「一回生の時？あれはひどいよ！未成年のくせに酒飲んで、酔っ払って告白されて、…正直幻滅したわ！」

「だから？」

「だからかな。でもね、それ以降、明らかに私を避けてたでしょ？」

「仕方ないだろう！それまで通りという訳には行かなかった」

「私は一応、あの時は気になる人がいたし、でも別れてからは…」

「わかったよ。その話は後で聞くよ。もう時間だろ？」

まだ話していたいが、時間だ。話をしながらも、校舎を出ていく人間を観察していた僕は三井が歩いて行くのを確認していた。

三井は一瞬こつちを見た。そして、「あの場所で待っている」と言った気がした。隣にいる立川裕美はそれに気付いていただろうか？

「う、うん。じゃあ行くね」

突然会話を切った僕を不安げに見つめながら、彼女は僕に背を向け、セミナーのある校舎へ歩き出した。

「今日の夜はヒマ？」

僕の言葉に驚いて振り向いた彼女は笑顔で答えた。

「うん。でも何でなの？」

「飯を食べに行こう！続きはその時でいい」

彼女はうん、と微笑んで駆けて行った。

これでいい

僕は行くか、と立ち上がり、校門へと歩き始めた。校門の壁にもた

れ掛かるようにして待っている三井の場所へ一直線に歩を進める僕を彼は目を離すことなく捉えていた。

「待たせたな。彼女と話して何か変わったかい？」

「いや、何も変わってない」

「良かった。ころころ変わられても困る」

「それは残念。変わったよ、ころころと」

「……」

「じゃあ帰ろう！」

僕たちは校門を抜け、同じテンポで歩き始めた。

「勿体振る必要はないよ。答えを言ってもらっていい」

どちらも歩く速度を緩めない。

「そうだな。じゃあさっさと僕なりの答えを言おう」

「……」

「答えは“死ぬる”だ」

「……どうしてそう考える？」

「言っておくが、実際にそんな経験なんかした事がないから、もし本当にそんな場面に出くわしたら、どうなるかなんてわからない」

「それじゃ……」

「話はまだ終わってないんだ。どうなるかわからないけど、それでも僕はベストを尽くしたい。二人が生き延びるように。それが出来なくても、彼女が生きれるように」

「……」

「そうしないと、後悔するんだよ。きつと一生。もし僕が死んでしまったら、彼女が後悔するかも知れないし、そうでないかも知れない。でもこれは勝手な思い込みなんだけれど……」

「僕はきつと彼女の記憶の中でずっと生きれると思う」

「迷惑な話だね」

「ああ、間違いない」

「彼女がいつかそんなこと忘れて人生を楽しんでいたら君は後悔しないのかい？」

「少しは嫉妬するだろうな。でも、僕は彼女の残りの人生を苦しめるために犠牲になる訳じゃない」

「綺麗ごとだよ。そんなのは」

「僕は希望を言ってるんだ。後悔するかもしれない、でもしたくはない。後悔すると分かっていたら選べない」

「…分かったよ。君はよく考えてくれたんだな」

「これで満足なのか？」

それまで同じだった二人の速度がズレた。目の前には線路がある。

彼は歩くことをやめていた。

「満足したよ。君に聞いて正解だった」

「正解？」

三井は僕を見るというよりは、その奥の線路の上、いや、遙か彼方を見ているようだった。

「ごめんなさい。…最初に謝っておくよ」

彼は急に深々と頭を下げ、そして上げた顔は無表情とは程遠い、寂しい顔をしていた。

「どうした？」

「僕は君に嘘をついていた」

「嘘って？どれがなんだ？」

「どこから言えばいいのか。まず僕は立川裕美に特別な感情は持っていない」

「え!？」

「高校が一緒なのは本当なんだ。だから話はするし、君と付き合い出したことも聞いたんだ。会ってないこともね」

「裕美に頼まれたのか？」

「違うんだ。これは彼女のためにした僕の余計なお世話なんだよ!」

僕たちの横を電車が凄まじい速さで通り抜け、遅れてやってきた突風が僕たちを横殴りした。それを黙ってやり過ごして、話を戻した。

「そうか。君の言ったことが本当かどうかわからないけど、少し安心した。正直君が怖かったからね」

「それぐらいの方が真剣になるだろう?」

「まあね!君の思惑通りだ」

「このことは…」

「言わない」

「ありがとう。僕も嫌われたくはないからね」

「大丈夫だ。三井のおかげで裕美のことをよく考えられたよ。これも狙いかい?」

「もちろんだ。言っただろう?二つしかない答えをすぐに出すよりも時間をかけて考えてほしいと」

「そうだった。そしてその通りになった。僕が24時間の中で、どれだけ考えたかはわからないけど…」

「もう、いいんだよ」

「そうだな」

「答えは結果でしかない。校門で浅井君の顔を見て、答えは必要ないと思うたんだ。君は晴れやかな顔をしていた」

「……」

「じゃあ、行くよ」

「最後に聞きたいんだけど、どこまで展開を予測してたんだ？」

「大体全部予測通りだ。君という人間を知っていたからね」

「話もしてないのか？」

「話すことが全てじゃない。君もそれは分かってるだろう。僕たちは似ている」

「僕は友人のためだけにそんな質問は出来ない」

「僕もだよ」

「？」

「……もう行くよ。君も電車を待たなくてはいけなくなる」

三井は僕に背を向け、歩き出した。僕はその背にやっとの思いで声を掛けた。

「お、おい！」

振り向いた彼は涙を流していた。その表情の変化の理由が見つからなかった僕はどうしたらいいかわからなかった。

「僕には兄がいたんだ」

それが過去形であることが、背筋を凍らせる。

「兄は僕が小学生の時に死んだ、僕を助け出された後、倒壊した家の中でね」

「……」

「僕は小学五年まで神戸に住んでいたんだ。そして、おばあちゃんに住んでるこっちに引越して来たんだ」

「……そういうことか。悪いことを聞き出してしまったな」

「いいんだ。兄は僕の中で生きている。あの時、僕の傍には“死”

があつた。でも兄が身代わりになつたんだ」

「…後悔してるのか？」

「後悔しようがないよ。僕は意識がなくて、選択の余地がなかった。でも…」

「重かつた？」

「いつまで経つても兄が消えないんだ。それは感謝よりも憎しみが強かつたと言えるよ」

「……」

「だから浅井君の答えで少しは救われたんだ」

「もういいよ。それ以上ただの答えを重くしないでくれ」

「うん、そうだね」

「いい24時間だった」

「そう言ってくれると問題を出した甲斐があるよ」

「もう御免だけだな」

三井は満面の笑みで「わかつてるよ」と言つて、また歩き始めた。その背中を見送つた僕は駅には行かず、来た道を戻り出した。

結局、24時間の中で僕が選んだのは朝に見た夢だった。あの海中で沈みゆく僕は彼女に最後に何と言つのだらう。あのテレビで見た惨状の瓦礫の中で三井のお兄さんは何と言つたんだらう。

それは「がんばれ！」であつてほしい

「腹減つた！」

そう嘆いた僕は起きてから何も食べてない。そして立川裕美の話の続きも気になるし、今日の晩御飯は騒がしくなりそうだ。

もう、僕に不信感はない

（後書き）

初の短編小説です。できれば評価お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8388b/>

深海

2011年10月3日08時15分発行